和辻倫理学の基礎概念「人間」の生成過程の研究

二瓶孝次

一、和辻哲郎の倫理学体系の基礎概念としての「人間」の生成問題

和辻哲郎の倫理学の確立は『人間の学としての倫理学』（昭和九年）[1]によって事実上果たされていると考えられる。その主著『倫理学』上中下巻三部作（全集版は上下二巻）[2]は『人間の学としての倫理学』において「人間の学」の基本構想が得られたことによって土台を据えられたのである。[3]他方『人間の学としての倫理学』はそのアイディアを昭和六年の岩波哲学講座所収『倫理学―人間の学としての倫理学の意義及び方法―』[4]に負う。この著作は形式上、国語学的材料を解釈学的手法により仏教論的にまとめた所に成立したと言うことができる。とりわけ「人間」概念の確立が「人間の学としての和辻倫理学」の根底を形成し得た。従って和辻倫理学の成立を問題にする時、その「人間」概念の生成確立の模様を時期の特定を伴って明らかにすることは極めて重要な課題となる。この点、従来の諸研究は解釈学的手法に関しても、又仏教論的要素に関しても相当進展を見たが、[5]国語学的方面はまだ不十分と思われ、今特に「人間」の解釈の国語学的検討を介し、用語面から和辻の「人間」論の生成過程を解明したい。

二、「人間」の解釈をめぐる国語学的再検討

和辻がその倫理学体系への導きの糸として見出した「人間」の概念は、周知のように、〈「世の中」自身であるとともにまた世の中における「人」である〉（岩波全書版『人間の学としての倫理学』二十～二十一頁）。この人間概念の発見は表から見れば彼の標榜する解釈学的現象学の方法の適用の一例として素直に受け取れる。しかし国語学的厳密性をもって和辻のこの基本概念を再検討することもなお有意義であろう。もともと「人の住む世界」「世間」「世の中」を意味した「人間」という言葉が、現在のような「ひと」「人々」「人類」の意味に用いられるようになったことを踏まえて、逆にそこから再び回顧的に、「人の住む世界」「世間」「世の中」の意味を取り戻して、且つ、「間」の字義のひとつである「あいだ」をも加味し

て和辻独自の人間概念が成り立っている。この要素のひとつである人間の語義の変遷はどのように説明されるか。和辻によればそれは次のようにして起こったのである。

「仏教の輪廻観は、衆生の経めぐる世界を地獄中、餓鬼中、畜生中、人間、天上の五界、あるいは阿修羅を加えて六界とした。衆生は「人間」に生じた場合に「人」であり、「畜生中」に生じた場合に「畜生」である。ところで漢訳経典はしばしばlokaの訳語たる「中」を省略して、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上というごとくに二字をそろえて並べている。そこでは人間が直ちに畜生・餓鬼等と対立せしめられる。そうしてこの形において六道の思想は平安朝より武家時代に至る日本人の人間観を支配していたのである。だから一方では「人間の人」というごとく、「人間」を明らかに人間社会の意に解しつつ、他方では畜生との対比に際して、畜生に対するものを人間と呼ぶということが起こって来る。すなわち畜生界の住者たる畜生と、人間の住者たる人とが対比せられるのであるにかかわらず、人間が直ちにその中の住者「人」の意味において畜生に対立する。」（十七～十八頁）

さて和辻は、「もし「人間」という言葉が本来「人」をも意味し得るのでなかったならば、いかなる媒介があったとしても」人間が人の意味に転じることはなかったであろうと考える（十八頁）。そしてそこから全体と部分の弁証法的関係を日本人が日常的にとらえているという思想的根本構造を分析して行き、この基本構造に拠った人間の学の構想が確立されて行く。しかしながら、国語学的ないし言語学的客観性の立場から検討すると、和辻の論理展開には幾つかの疑問点がある。その一つは、全体と部分の弁証法的関係は、必ずしも日本人の思考と日本語にのみ特有のものではなくて、人知ないし言語一般の象徴的比喩的能力の一例ではないか、ということである。例えば、「英語worldでは、世界→世界の人、の如き転義がみられる。[6]」また「一瓶のワイン」（中身）のことを単に「ボトル」（容器）とも言う。そう見ると、「人間」の語義が「人界」（場所）から「人」（その場所に有るもの）に変わったのは語義の変遷可能性の枠内における一事例に過ぎず、特別な日本思想史的事件とは言えない。そこに特別なものが読み取れるとすれば、それはあくまでも思想家和辻の独創と言う以外にない。

ただし、純粋に国語学的見地から「人間」の語義の変遷を問題にする時、それに与えた和辻の解決は先駆的である。例えば国語学者大野透は[7]「漢訳経典はしばしばlokaの訳語たる『中』を省略して、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上といふ如くに二字を揃へて並べてゐる。そこでは人間が直ちに畜生・餓鬼等と対立せしめられる。」という和辻の主張に対して、「かかる対比は場処の対比である事が常に明かであって、場処とその所属者との混同は起り得べくもなく、事実、和辻説の裏書となる様な日本語資料は全く存在しないのである。」と和辻説を否定する。しかし大野の見解も基本的に和辻説と同一である。何故なら「人間が人間界の住人を意味するに至ったのは、人間界を表す「人間」がその住民を表すとも見られる例が多かったからである」という大野説は直ちに和辻説であるからである。例えば大野は次のような例を挙げている。

（1）夜快雨。先是、数日不雨、田畝頗苦、今日人間歓喜、以為

冥感。（文徳実録、天安元年八月壬辰）

（2）香のけぶりは仏をむかへたてまつる使なり。人間はくさくけがらはし。まさによき香をたくべし。（観智院本三宝絵、下）

（19）去テモ定ナキハ人間ノ習、……人間ニ帰ラバ再ビ夫婦ノ契ヲ結ビ、浄土ニ生レバ……。（太平記、一、頼員回忠事）

これらにある「人間」はいずれも厳密には「人の住む場所たる世間」という本来の意義用法の語であるが、これを日本人は「人々」の意味でも理解するように言語意識を変えていったのである。この見解は大野と和辻で完全に一致する。けだし「狂言『こんくわい』が狐をして「人間といふものはあどないものぢゃ」と言わせているごときはその適例である。」（十八頁）とする和辻の見方は本質的に大野と通じる。従って大野の資料と論説は悉くが和辻の先駆的仮説を証拠だて補強する。例えば「死此生彼、天上人間禽獣魚虫ニ生ヲ替テ（太平記）」という大野の引く資料（22）は、まさに「人間」が一方では「天上」たる場所に対比して場所の意味をもつと同時に、他方では「禽獣魚虫」に対比して直ちに「人身」を意味する。これこそ和辻の主張に外ならない。これに私見を一つ付加するなら、輪廻的人間観においては、特に畜生界は伝統的に人間界といわば混融している世界と見られている（人々の住むこの現実世界に諸々の畜生類もまた同居している）[8]から、特に畜生と人間との対比から人間の語義に人の意味が付着する可能性は多大にあったと考えられる。

ただし、もし「和辻説の裏書となる様な日本語資料は全く存在しない」という大野の断定が、「地獄・餓鬼・畜生・人間・天上というごとくに二字をそろえて並べている」箇所を持つ「漢訳経典」の存在は指摘されない、ということなら、厳密には多分その通りだろう。確かに和辻は地獄・餓鬼・畜生・人間・天上という文字列をもつテキストを一つも挙げていない。しかしこれは必ずしも大野のように文字通りに受け取る必要はない。事実、漢訳経典類において地獄中と地獄、餓鬼中と餓鬼、畜生中と畜生、人間と人、天上と天の厳密な使い分けは常には行われていない。

例えば、「日本において最も多く読まれた法華経」（十六頁）と和辻も言うその法華経漢訳（授記品）には、「無四悪道。地獄。餓鬼。畜生。阿修羅道。多有天人。」（四悪道たる地獄・餓鬼・畜生・阿修羅の道無く、おおく天・人有らん。）[9]とある。ここでは前文の「地獄。餓鬼。畜生。阿修羅道」が四悪道として場所を表わすのに対して、後文の「天人」は天及び人という主体者を表わす。けれども記憶に残るイメージとしては、場所または主体者のいずれかに、乃至両義ともども含んだ形に、読者の意識において六者が統一されてしまうことは容易に起こるであろう。

また同じく法華経譬喩品には「又以貪著追求故。現受衆苦。後受地獄。畜生餓鬼之苦。若生天上。及在人間。貧窮困苦。愛別離苦。怨憎会苦。如是等種種諸苦。」（また、貪著し追求するをもっての故に、現には衆の苦を受け、後には地獄・畜生・餓鬼の苦を受く。若し天上に生れ、及び人間に在れば、貧窮困苦・愛別離苦・怨憎会苦、かくの如き等の種種の諸の苦あり。）[10]とあるが、この場合は、「地獄、畜生、餓鬼、天上、人間」という同位羅列のイメージが容易に形成される。和辻の言わんとした所はこれであろう。

三、「人間」概念の準備としの「国民」

先に〈「人間」の語義が「人界」から「人」に変わったのは語義の変遷可能性の枠内における一事例に過ぎず、特別な日本思想史的事件たりえないように思われる。そこに特別なものが読み取れるとすれば、それはあくまでも思想家和辻の独創と言う以外にない。〉と述べたが、実はこのことを裏書きする事実がある。それは、和辻は「人間」の解釈を営む前に既に実際にその思想的概念を抱懐していたのであって、後に「人間」という表現に出会うことによって言わばその結晶化を成就したと思われるのである。

このことは和辻の「人間論」の生成自体に関する重要問題に属するが、これについては最近の研究である吉沢伝三郎「国民道徳論からする人間論の生成」が示唆に富む。即ち吉沢は「和辻独特の人間論の構想の発端に風土論の着想が位置していると考える。そして風土論のこの着想は「国民性の考察」と関連しており、更に後者は明治以来の国民道徳論の批判という形で展開される。和辻独特の人間論における「人間」という概念が初めて構想されたのはいつであったかは正確には確定し得ないが、ともあれそれは「国民」という概念から生成したのではないか。[11]」

「和辻はハイデッガーの『有と時間』に深く触発されながらも、風土の印象という具体的な体験によって彼なりにハイデッガーの見解に不充分な点を感じ取ったが、その点は『風土』の「第一章　風土の基礎理論」の原論文「風土」（昭和四年四月一日）において和辻が次のように述べているところからして明らかに看取しうるであろう。「我々は日常生活の最も手近いかゝはりに於てすでに「感受し働き出す」といふ二重の構造を認めなくてはならぬ。我々は感受しつゝ働き使用するといふかゝはり方に於て最も手近かなものに出合ふ。そこには「風土」や「道具としてのもの」が見出される。我々はこれらのものへの感受的な或は使用的な「かゝはり」に於て、おのれを指し示すといふ仕方によって、すでにおのれを理解してゐる。この「かゝはり」、ものと我々との出合う場面、この我々とものとの「中」が「世の中」の現象である。かく見れば風土が「世の中にあるもの」として最も著しい位置を占めることは明らかであらう。然しそこには常に「我々」が寒さを感じ「我々」が着物を着ることが問題とされてゐるのであって、云はゞ世の中が公共的であることは予め前提されてゐるのである。しかし何故にかゝることが前提し得られるのか。それは「もの」とのかゝはりがそのあらゆる契機に於てすでに共在する人を見出してゐるからである。我々は道具或は風土のうちへ出てゐると同時に人のうちへ出てゐる。おのれを「我」として反省するよりも前に、すでに人のうちへ出てゐるおのれを理解する。さうしてこの人とのかゝはりに於て、互いにおのれを理解しつゝそれが他の理解であることを理解する。従って「世の中」の現象はすでに初めより我々の間のかゝはりを含んでゐるのである。[12]」（全集別巻一、三九九～四〇一ページ）ところで和辻のこのような見解において今ひとつ注目すべきことは、ここで「風土」という概念との関連において「世の中」という概念が明確に打ち出されているという点である。ここでの「我々の間」すなわち「世間」という概念には、既に人と人との間としての人間という和辻固有の人間概

念が認められることは明らかであるが、しかし和辻独特の人間論、すなわち人間の学としての倫理学という構想はここではまだその生成過程の端緒にあると見るのが妥当ではないであろうか。」[13]

「ところで和辻は『風土』の「序言」最終段落で次のように述べている。「この書は大体において昭和三年九月より四年二月に至る講義の草案を基礎としている。この講義は、外遊より帰って間のない時、人間存在の時間性・空間性の問題を立ち入って考究する余裕もなく、ただ風土の問題のみを取り上げて論じてみたのである」。ここで「昭和三年九月より四年二月に至る講義の草案」と言われているものは全集別巻一に抄録されている「国民性の考察」ノートのことであるが、この講義ノートについての米谷匡史氏の次のような解説は、私たちが既に注意を喚起しておいたこととも符合する妥当な見解であると言えよう。「単行本『風土』の「序言」で和辻は、ハイデッガーの現存在分析においては空間性が二次的にしか論じられていない点について、ハイデッガーがそこに留まったのは彼のDaseinがあくまでも個人に過ぎなかったからである。彼は人間存在をただ人の存在として捕えた。それは人間存在の個人的・社会的なる二重構造から見れば、単に抽象的なる一面に過ぎぬ。…と述べているが、このような観点は「国民性の考察」ノートの執筆時（昭和三～四年）や雑誌論文「風土」（昭和四年四月）の頃にはまだ確立していなかったものである。独自の人間学の体系化が構想されたのは昭和五年頃のことであり、その後の昭和一〇年に至って風土論に関連する諸論文が単行本にまとめられている。それは、すでに前年に『人間の学としての倫理学』が刊行され、主著『倫理学』の執筆をすすめていた時期であった。このような背景の下に、単行本の「第一章　風土の基礎理論」は人間学の枠組のなかに位置づけて書き直されており、同書「序言」でも…その観点からの総括がなされたと見ることができる。単行本には「人間学的考察」という副題が付されているが、それはあくまでも単行本化の時点での観点をあらわしたものであり、この講義ノートの段階ではまだ「人間学」は整備されていなかったと考えてよいだろう。」（全集別巻一、四八五～四八六ページ）[14]

「米谷匡史氏がこの講義ノートについての解説において適切に指摘しておられる通り、ここに見られる「国民性」についての和辻の考察からして、私たちは和辻の「風土論」の構想の焦点がもともと「国民性」の考察に存することを察知することが出来るであろう。米谷匡史氏の解説は次の通りである。「和辻が風土論を構想するに至ったきっかけとしてはハイデッガーの時間論に対抗して空間論を試みたという側面が強調されることが多い。しかしこの「国民性の考察」ノートの冒頭部分を見る限りは、当初の問題設定の焦点はあくまでも「国民性Nationalcharakter」にあり、マルクスの理論をとり込みつつ批判的に拡張しようとする姿勢で書き始められていたことがわかる。そこで彼はハイデッガーの現存在分析の方法を借りて、地理的自然の規定によって「国民性」が成立するメカニズムを理論的に解明しようと試みた。」（全集別巻一、四八一～四八二ページ）。

和辻の「国民道徳論」にはその初期の草稿から後の整理された形態のものに至るまでいくつかの資料が残されているが、いずれにしてもその基本的な構想は『倫理学』の構想よりも一層包括的なもの

である。すなわち、その構想には後の『倫理学』ならびに『日本倫理思想史』、および両者の関連についての基本的な構想が包括されており、その点はその最も古い資料たる「国民道徳論」構想メモにおいて既に明確に示されている。この「国民道徳論」構想メモは、米谷匡史氏の解説によれば昭和五年頃のものと推定され、昭和六年に執筆された「国民道徳論」草稿は本資料をもとにして執筆されたと思われる由である（全集別巻一、四八六ページ）。そして後者の「国民道徳論」草稿に関して米谷匡史氏は次のように解説しておられる。

「本草稿は、京都大学での昭和六年度の講義「国民道徳論」のための講義草案として、昭和六年の四月頃から七月頃にかけて執筆されたものと推定される。昭和六年四月二日付谷川徹三宛書簡では次のように述べている。「新学期から「倫理学概論」といふものを講義する事になりましたが、この倫理学が途方もない倫理学なので、今から楽しみなのです。この草稿を初めから原稿に書き上げるつもりです。もう一つは国民道徳論といふものをやります。これもこれまでの国民道徳論をすっかりやっつけるので楽しみです。」ここで言う「倫理学概論」の原稿とは、同年一二月に岩波講座『哲学』に「倫理学」として発表された論文を指している。それをもとにしてさらに昭和九年に『人間の学としての倫理学』が刊行されたのであった」（全集別巻一、四九〇ページ）。

いずれにしても当初「国民道徳論」の原理論に相当する部分として構想された倫理学が和辻のいわゆる人間の学としての倫理学の始原的な形態であり、従って、そこにおいては「人間」という概念はまずもってその最も具体的な形態たる「国民」という概念に中心を置いて構想されたと見てよいであろう。そして「人間」という概念を「国民」という概念に中心を置いて構想するという仕方は、和辻にとって極めて利点に富むものであったと言えよう。というのは「国民」という概念には、個人としての国民と全体としての国民という両義性があり、しかもいずれかと言えば全体としての国民という意義のほうに力点があることは明らかであり、従って人間存在を個人性と全体性との二重構造を有するものとして把握しつつも、いずれかと言えば人間存在の全体性をより基礎的なものとして把握する傾向を孕む和辻の人間概念がまずもって最も具体的に把握されるための手がかりとしては、「国民」という概念は極めて恰好のものであったに違いないからである。[15]」

四、和辻における日本語への哲学的関心と「人間」の再発見

このように、「人間」概念は「国民」概念の中で予め準備されていたのであるが、しかし「国民」という表現に留まる限りは、「人間」という表現が果たし得たような和辻倫理学の原理論的部分を開発し展開することは出来なかったのではないだろうか。というのも「国民」は「人間」のような言わば存在論的普遍性は有しない表現であるからである。どうしても特殊的制約を免れない国民道徳論の基底に、哲学的普遍的な人間構造論を和辻が設定し得たのは、ひとえに「人間」という日本語表現の発見ないし再発見によってであったと誇張でなく言うことができる。その意味では如何にして、且つ、何時和辻が「人間」という日本語表現の再発見をしたのか、ということが意味深い問いであり得る。これに関しては先にも見たように「和

辻独特の人間論における「人間」という概念が初めて構想されたのはいつであったかは正確には確定し得ない（吉沢伝三郎）」と言われ、また「独自の人間学の体系化が構想されたのは昭和五年頃のこと（米谷匡史）」とも言われていた。しかし我々は現在、これよりももっと進んだ形で和辻における「人間」の発見と再発見の事情に言及することが出来る資料を有すると思われる。

それは和辻が日本語に対して哲学的関心をもっていたことと関連している。事実、「倫理」「人間」「世の中」との密接な関連のもとにその「人間学」において論述されている「存在」という概念・表現が昭和四年の二月と四月に京都大学哲学科機関誌『哲学研究』で「日本語に於ける存在の理解（一）」「同（二）」として論究されている。これは昭和三年十二月一日、京都哲学会公開講演会での和辻の講演をもとにしたもので、後に加筆されて『続日本精神史研究』に「日本語と哲学の問題」と改題されて収められた。もっとも内容的には必ずしも人間学的「存在」の論と直ちに結合するものではなく、「純粋なる日本語の意味を頼りとして（すなわち言語の意味に存せざる概念内容を他より持ち込むことなく）自ら問い自ら思索すること」[16]を日本哲学界に向けて提起したものである。しかし後に達成された「倫理」「世間」「人間」「存在」の分析は明らかにそのような哲学的日本語研究の問題意識から実現されたものと考えて差し支えない。

そこでもっと具体的場面に注目するならば、『人間の学としての倫理学』の核心部分である第1章の二「人間」という言葉の意味の叙述の合間に、「新村博士の教示によれば、慶長八年（一六〇三）長崎キリシタン版の日葡辞典には、Ninguen. Genero humanoとある。動物から区別せられた意味での人類である。」という割注がある（十八頁）。ここで新村博士とは、京都帝国大学における和辻の同僚で国語学者・新村出であろう。これからすると、和辻と新村との間には学問的交流があったことが窺われる。そこで因に、書簡のルートからこの問題に関する二人の交遊を調べてみると、全集に最近第二五巻として増補された和辻の書簡集には新村出宛は六通収められているが、いずれも当該事項には関係がない。[17]他方、新村出全集第十五巻の書簡集によると、まさしく該当する文面が見出される。この書簡集の編集は宛名毎になっているから、「和辻哲郎宛」は一目瞭然である。[18]その十通あるうち、書簡番号三乃至六の四通が「人間」に関連しており、同七の一通が「存在」に関係している。つまりそれらは和辻の質問に対する新村の国語学的教示となっている。今それらを必要な限り全部引用しておこう。

五、和辻哲郎への新村出の書簡

書簡番号三〔昭和四年七月二十七日〕

先刻の好題目帰宅後直に座右の本を見ましたが、既に御一らんの辞書以外では、①慶長八年（一六〇三）長崎吉利支丹版の日葡辞典に、「Ninguen. Genero humano」とあるのが、過渡期の意味を示すものとしては、一寸参考になるかもしれません。同辞書の仏訳本（Pages訳一八六七）には「genre humain」とあります。②村田了阿の著とされてゐる俚言集覧、これは文化文政天保頃のものでせうが、それには当代の俚諺二三をあげつゝ、「人間　俗に人を人間と

云〇世の中といふ事也」とあります。「俗に」といふqualifierがおもしろいと思ひます。その外、辞書に出てゐる用例は、御承知のとほり、粗雑な挙げかたでありますから、吟味を要すること申すまでもありません。なほ実際のtextで見かけたら、之から注意しませう。これで失礼します。

書簡番号四〔昭和五年一月十七日〕

けふはからず甲陽軍鑑を見てをりしに、昨年夏お話ありし「人間」といふ語の用例につき参考さるべき文句を見出し候間抄出してお目にかけ申候。天正三年の原本のやうにしるしあり候へども、徳川初期の編とせば間違なかるべく候。版は明暦二年のものに候。（第十三冊）甲陽軍鑑品第四十上、巻第十三或夜又信玄公、各御咄衆へ、仰下さるゝ、人間は、大小によらず、身をもつ事、一つあり。（四丁オモテ）…惣別、人間ハ、遠慮なからして、才覚ありて、分別有ならば、何にても仕り出し、後の世までも、とどめをかん。（八丁オ）…人間ハ、分別の二字、諸色のもとと、存候。（十六丁ウ）…人間に、あまり、ちがふたる人は、世の中に、あるまじき、と（十九丁オ）（第五、六冊）甲陽軍鑑命則巻品第十三、巻第五…人間の、四十をこさねば、やまぬ腫物、と是をいふ。

書簡番号五〔昭和六年五月二十二日〕

辞源（この辞書、文学科の閲覧室にもあるやうに候）人（一）動物之最霊者。（二）己之対。他人衆人皆曰人。（三）官吏之小者。

この辞書、民国時代の著なれど、御参考おすすめいたし候。或ハ既に其道の方よりおききずみかとも存候へども、一昨日以来、頭中に去来せるにより申候。本日ハ雨天につき、図書館にひきこもりをり候。来週拝顔のをり更に高教に接すべく候。

書簡番号六〔昭和六年五月二十三日〕

日本紀、「他」をヒトと訓せしよし、倭訓栞にて之を見、その索引に照せしも出所をつきとめ得ず、遺憾なり。古事記の歌にもヒトを「他」の意でよみ、万葉亦然り、されば小生ハ、支那よりの伝来又ハ影響にはあらで、日本独発なるべしと思へり。自己をinclusivelyニせずにexclusivelyにヒトをpeopleの意味、collectivelyニ観じてあゝいふ意義を発展せしめしなるべきが、西洋の方へそれが起らざりしこそ却て意外の感を起さしめ候。Populus, peopleなどに「他」（自己以外）の意の意義起らざりしや否や考へて見たく候。いつも面白き問題を提供せられてありがたく候。やはりphilo-sophyとphilo-logosとハ希臘以来の如く提携すべきものにや、あとハ来週拝顔のをりにゆづり候。

書簡番号七〔昭和六年六月十日〕

毎々面白い問題を提供され感服の至ニ候。手数料を戴くことは此の際免除として、さて「存知」「存念」「存慮」「所存」、鎌倉初期までは上らざらん、日本紀（斉明紀の末ニ引ける日本世記）ニ「存注」とあるを「オキシルス」と訓せる所より見るに、やハり「存置」の字義ニ出でたるなるべく、恐くハ「存□」とある第二字の意味、第一字ニ移入して、第二字落ちたるものにはあらぬか、王朝時代の法

律用語かもしれず、令や格式などニあるかも知れずと存候。保元、平治、平家、吾妻鑑…（太平記…）以前、平安朝の文献（国文）ニハ未見のやうニ候。東京より帰ったらゆっくり探して見ませう。

別紙、書き了りし後、「心得」といふ語あり、心に領得、会得の義なれば、「存」ハ心ニ存する、心に存しおくの義ニや、など思ひて、伊勢貞丈の安斎随筆（九）を見しニ「心に存する」といふを略して「存する」とのみいふ由見候。当らずといへども遠からじ。心得ハすでに竹取、枕にあり、おもしろけれバ序でに申上候。

更ニ進んで、（最古の辞書）爾雅（釈詁下）を見るに、在も存も省・察の訓があり、玉篇（六朝）にも存＝察也とあります。視も察も省も、知の前提でせうから「存」の字の古義に既ニ、（存知――コレモ古イ熟字カモシレヌ。存ス知レヲデハナイノデセウト思ハレマス）察知の意が含まれてゐることを知ることが出来ます。さうすると、私どもが小耳にはさんでゐる所のcogito ergo sumの理ニ叶ふやうで面白くなります。Cogitareよりesseが出てくるのでせう。これで今晩ハねます。

これらを見ると、和辻は新村との面談中に質問を行ない、新村が文献にあたって調べた所を書簡で知らせている様子である。直接口頭での情報提供もあったであろうから、これらの書簡が新村の提供した情報の全てではないであろうが、少なくともこれにより、昭和四年七月頃に「人間」の語義の歴史的変遷について、和辻が新村に初めて口頭で質問を行なったという事実が確証される。

所で昭和四年七月という時期は、ドイツから帰朝後ちょうど一年であり、先に言及した彼の日本語への哲学的関心の初発的高まりの真最中に当たる。即ちこの年の二月と四月に、前年秋に行なった講演をまとめて「日本語に於ける存在の理解」という論文を『哲学研究』に発表している。故に、彼が「人間」という語についても探究し始めたのが、まさにその年つまり昭和四年の四月から七月にかけての時期であることが推定出来るのである。

六、「日本語と哲学」メモ（昭和三年）における人間論

これに関して、和辻全集に最近増補された別巻二に収められている「日本語と哲学」メモ（昭和三年）は重要な意味をもつ。同書資料解題によれば、このメモは先に触れた昭和三年十二月一日の京都哲学会公開講演会での和辻の講演用のもので、「このメモは昭和三年七月に留学から帰った和辻が、ハイデッガーの『存在と時間』に触発されて日本語による存在論の試みを構想した最初期の様子をうかがわせるものである。とりわけ「世の中」「人と人との間柄」としての「人間」という着想が（現存する資料の中では）初めて記されたものである点で興味深い。」（米谷匡史）[19]

事実、そこには次のような書き付けがある。

「世の中とは何であるか。［中略］

即ち「よ」とは人生であり、世界であり、人間社会であり、歴史的に変遷するものである。「なか」は空間的にも意味の上でも中、内、を意味すると共に、inといふ言葉の有せざる意味、即ち「交り」「なからひ」「間柄」を意味する。「男女のなか」「なかが悪い」等。即ち人と人との間に中間があるといふことは、人の孤立を意味せずし

て、両者の交渉関係を意味する。そこで「世の中」とは世のなか、うちといふのみでなく、「世に於ける人と人とのなか」を意味する。だから、言海は「世上の時勢人情などの総称」と註してゐる。仏語の「世間」「人間」と同義であり、この「間」がなかに当るのである。複雑なる交渉関係に於てある人生の社会的歴史的なDaseinが「世の中」である。「人間」といふ言葉は本来この「よのなか」を意味するのであって孤立した個々の人を意味するのでない。文字通り「ジンカン」である。「人のあひだ」である。」（三七〇～三七一頁）

これを見る限り、既にここで和辻はその独自の「人間」観に目覚めていると言える。しかし厳密に見るとここでは「人間＝世の中・世間」であって、後の「人間」と「世の中・世間」との概念的分離が為されていない。ということは「人間」がまだその個別的主体性をも契機としてもつ全体性においては把握されていないということであり、倫理学的存在論の中枢的概念には未到達であったということである。それに達するには、「人間」という言葉に関して、①人の世⇩②人⇩③「人の世」の再発見⇩④「人」と「人の世」との総合統一としての「人間」概念の確立、という全行程を踏み通す必要がある。ここでは和辻はまだ、③「人の世」の再発見の段階に留まっている。

実際に講演ではこの問題に触れたかどうか不明であるが、これをもとにした「日本語に於ける存在の理解」なる論文が（二）以後中絶して終ったのは、それに続く考察過程で、いよいよ特に「人間」の語をめぐる問題が中心的なものとして和辻に現われて来たからではないのだろうか。そこで鋭意、特にその語義の歴史的変遷を調査する一環として、同僚の専門家・新村出にも助力を乞うたということであろう。かくして和辻の昭和四年は極めて精力的に「人間」の語の国語学的哲学的解釈学的研究が集中された時期と推定される。

七、「国民道徳論」（昭和五年）の人間論

全集別巻二には又「国民道徳論」なる講演筆記が収録されている。「昭和五年四月二一日付の『京都帝国大学新聞』によれば、同年四月一四日から七月八日まで、退役軍人のために陸軍省主催の第四回社会教育講習会が京都帝大の学内で開かれており、和辻はその内の「国民道徳」の講座を分担している。本資料はこの公開講義の筆記原稿であると考えられる。この講習会の開催期間のうち、和辻の講義が行なわれた正確な日付は不明である。なお、「国民道徳論」構想メモ（別巻一）はその章節立てがこの講義の章節立てと完全に一致しているので、この公開講義のための参考資料として作成・配布されたものと考えられる。」（米谷匡史、四八三～四八四頁）

この資料の「人間」論は、先のに比較して相当進み、④総合統一の段階に達している。「第三節　当為としての国民道徳

人間は必ず一定の時代、一定の民族に属している。これらを離れた純粋な人間は抽象されたものであって、具体的な人間ではない。［中略］そうして国民道徳は人間を離れては存在しないから、まず人間について研究しよう。

一　人間の構造

人間とは決して個人を言うのではない。個人としての人間は空間の一定位置を占め他から区別されたものであるが、これを表わす適

当な日本語はない。西洋語のMan（英）、Mensch（独）、Homo（羅）は日本語のひとであって、ひとは他人に対する語である。しかるに人間を表わす西洋語はない。『言海』には人間を「世間、世の中」と注釈してある。すなわち人間とは人生である。人間、万事塞翁馬の人間である。したがって人間に対する語は天上である。ゆえに人間は個人ではなくて社会的存在を意味している。すなわち娑婆の生活の匂いが人間臭いのである。人々の間柄自他の交渉関係、すなわち社会的存在が人間である。ゆえに人間は個人以上のものを表わしているのである。すなわち人間は個人であるとともに社会的存在である。」（五八頁）

ここでは「人間」は単に「世の中・世間」と同義ではなく、「個人であるとともに社会的存在である」という普遍的「構造」として把握されている。このように「人間の構造」が捕えられた段階を以て、和辻倫理学固有の且つその最基礎的な概念たる「人間」が和辻の思索の中で結晶したと考えていいだろう。[20] それは時期としては、昭和四年における「人間」の語義の集中的研究から、昭和五年夏迄における「国民道徳論」の公開講義準備に至る一年有余と見積もることが出来る。

註

（1）和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波全書19、昭和九年、岩波書店。これは『和辻哲郎全集』第九巻（昭和三十七年、岩波書店）に収録。

（2）和辻哲郎『倫理学』上巻、昭和十二年、中巻、昭和十七年、下巻、昭和二十四年、岩波書店。このうち上巻と中巻は『和辻哲郎全集』第十巻（昭和三十七年、岩波書店）に「倫理学　上」として、また下巻は同十一巻（同）に「倫理学　下」として収録。

（3）吉沢伝三郎『和辻哲郎の面目』筑摩書房、平成六年、九六～九七頁参照。

（4）『岩波講座哲学』第一巻、概説（一）所収、昭和六年、岩波書店。

（5）和辻が仏教論的立場においてフッサール的現象学を承けつつその最終局面たる生活世界論に既に突入していたとの分析を含む吉沢伝三郎「仏教的空観の立場」上掲書一一〇～一三一頁は、解釈学的方法と仏教論との和辻における結合を明らかにしている。

（6）大野透「人間・教養の語誌」国語学会編『国語学』一三四号、昭和五八年、武蔵野書院、左三頁。

（7）大野透、同上、左一～十頁。

（8）「畜生道を明さば、その住処に二あり。根本は大海に住し、支末は人・天に雑はる。」源信『往生要集』石田瑞麿訳、昭和四五年、岩波書店（日本思想大系）、三二頁。

（9）『法華経』坂本幸男・岩本裕訳注、岩波文庫版、上巻、三一四頁。原漢文も同所。

（10）同上、一七二頁。原漢文も同所。

（11）吉沢、上掲書、二三一～二三二頁。

（12）『和辻哲郎全集』別巻一、平成四年、岩波書店。

（13）吉沢、上掲書、二三五～二三七頁。
（14）吉沢、上掲書、二三四～二三五頁。
（15）吉沢、上掲書、二三八～二四一頁。
（16）『和辻哲郎全集』第四巻、岩波書店、昭和三七年、五二三頁。
（17）『和辻哲郎全集』第二十五巻、岩波書店、平成四年、書簡索引（七〇五頁）参照。
（18）『新村出全集』第十五巻、筑摩書房、昭和四八年、三九六～四〇三頁。

なお、新村出の「人と猿」という昭和七年の論文（『新村出全集』第三巻、昭和四七年、筑摩書房、一六〇～一六三頁）は固有の和語「ひと」の語源研究であるが、これは漢語たる日本語「人間」について和辻との間に検討調査のやりとりをしたことが発想の源になっているように感じられる。

なおまた、和辻の「人間」学に対して、新村的「ヒト」（「ヒは日・霊、トは所・物の意か」新村出編『広辞苑』岩波書店、昭和四十四年第二版以降参照）に沿った「ひとの覚としての倫理学」試論（未完）として、二瓶孝次「普遍的現象学（一）～（六）」『北海道教育大学紀要』ＩＡ第三二巻一号～第三四巻一号、昭和五六～五八年、及び、同「ひとの目覚め…普遍的現象学実際論其の二…人（ひと）は霊処（ひと）なり」北海道教育大学釧路校紀要『釧路論集』第十三号、昭和五六年、参照。

（19）『和辻哲郎全集』別巻二、平成四年、岩波書店、四九七頁。
（20）和辻的「人間」概念では本文でも見たように「人と人との交渉関係としての間柄」つまり「世の中」の広義と全く重なる意義が重視されており、この観点は現存資料の中で辿り得る最も初期の「日本語と哲学」メモ（昭和三年）でも前面に出ている。しかし「人間」の「間」は処を表し、アヒダを表さない」（大野透、上掲論文）とすれば、「純粋なる日本語の意味を頼りとして（すなわち言語の意味に存せざる概念内容を他より持ち込むことなく）自ら問い自ら思索すること」（「日本語と哲学の問題」『続日本精神史研究』）を求めたその日本語解釈学の当初の姿勢から離れて、「アヒダ」に固有の語義を「人間」の「間」に独自に輸入した所にまさに思想家和辻の独創が見られると言えよう。

（にへい・こうじ　北海道教育大学教育学部教授）